

研究室紹介

★人間探究領域 人間文化授業科目群

宮園 健吾 先生



★専門 現代哲学、心の哲学

Q. 宮園先生の研究内容を教えてください。

専門は哲学をやっています。哲学は古代ギリシアから続いているものだけど、具体的に言う

と比較的現代の哲学をやっています。主な関心は心の哲学です。例えば、人間が世界と関わる中で、どうやって世界のモデルのようなものの中の中で作るのか、そういったプロセスに興味があります。どうやってそのモデルが作られていて、どうやってそのモデルは行動に影響を及ぼすのか。それは、みんな日常的にやっていることなんだけど、人間が作り上げる世界のモデルを、世界があるように正しく作れないケースもある。そのケースを面白いなと思って。具体的には精神疾患とか統合失調症とか。我々は普段はモデルがある程度きちんと作っているけど、そういう極端なケースにおいては、モデルが現実からかけ離れてしまっている。そのようなケースを題材にして、ここ数年研究しています。博士論文のころから書いていて、本も書いてます。

Q. どうしてその研究をやるうと思ったのですか？

僕は留学経験が長くて、大学院で博士に上がる時に、ラッキーなことに学内選考に通ってアメリカに留学する機会がありました。合う人と合わない人がいるけど、僕は結構合っていました。

た。大学院の学位は日本だけど、博士課程はほとんど海外です。心の哲学は海外、とりわけ英米が非常に進んでいて、僕はアメリカに3年、イギリスに2年いましたが、すごく恵まれた環境で留学していました。その分野の第一線の研究をしている人たちと一緒に勉強や仕事をさせてもらい、その中で刺激を受けながら見つけたテーマなんです。日本にいるときは何をすべきかあまり分からずもやもやしていました。が、向こうでたくさん吸収して、見つけました。

Q. 担当科目を教えてください。

僕が担当しているのは教養科目で「哲学A」と「哲学B」、パッケージ科目で「科学技術の哲学と倫理」、専門科目で「現代思想」、「比較哲学A」、「現代思想演習」と「比較哲学演習」です。

Q. 大学生のときは何学部でどんなことをしていたのですか？

もともと教育や人間に興味があったので教育学部に所属していて、教育哲学を学びました。なのでいわゆる哲学科とは違いますが、教育を哲学的な観点から見るといったような学問で

す。でも、もっと本格的に哲学について学びたいと思って大学院に進学して哲学科に移りました。

Q・学部生のころはどんな学生時代を過ごしましたか？

けっこう不真面目な学生でした。勉強はあまりしなかったし、大学にもあまり行かなかった。だから自分が教員になってみて学生にあまり厳しく言えないのですが（笑）。当時は東京の大学で、兵庫県出身の人が集まる学生寮に住んでいたのですが、そこでみんな楽しく遊んだり、優秀な人が多かったのいろいろな刺激をもらっていました。研究などには興味があつたにも関わらず、あまり真面目に勉強しなかったことに後悔があつたので、大学院に進んで、そこでは積極的に学びました。

Q・趣味はありますか？

僕は3人兄弟でみんな男だったので、スポーツは結構なんでも好きです。そのあとは、体を動かさないと年もとつてくるのでと思つてやつてたんですけど、子供が生まれてからはなかなか。最近はずっと子供を見てるだけ

でもへとへとになるし。

Q・座右の銘はありますか？

なんとなく時間を過ごしていると、なんとなくあつという間に時間が過ぎてしまう。それは大学生だけではなくて、社会人とかも同じだと思うんです。だから、結構長期的な計画を立てることをいつも心がけています。ここ5年で何するんだ、ここ10年で何するんだ。ここまでいきたいよね、ここからそのためには今何しなきゃいけないのかなつていう風に、長期的な目標ですね。それは仕事に関してもそうだし、プライベートなことでもそう。5年計画、10計画、20年計画みたいな。

Q・紙に書いたりしてるんですか？

してますね。見せないけど（笑）。

Q・これからの目標を教えてください。

研究に関しては、大学院の駆け出しの時にずっと海外にいたので、海外で評価されるような仕事をしたとはずつと思つています。僕の分野では海外と切り離されている側面があると

思いますが、世界で活躍してきた人たちに認めもらえるような研究をしたいなと思つています。他方で、自分は日本で職を得て、そこで働いているこの環境はとてもユニークだと思つています。たとえば僕がやつてる哲学も、日本なりの考え方、日本の特殊な事情、背景があり、自分がいる環境の特殊性を理解して、自分の研究に生かしたい。また、自分は教員としては駆け出し、教育に関しては試行錯誤してる段階なので、どうしたら興味を持ってもらえるか考えています。研究も教育も、両方頑張りたいですね。

Q・最後に、総科の学生に一言お願いします。

真面目な学生が多くて、いいことだと思つます、僕が比較的不真面目なので。ただ、多少アンバランスでもいいから、「これだけは絶対だれにも負けないくらい熱中して一生懸命やりました」みたいな経験が大学時代にあると、自分の人生を形作る上ですごく大きなことにならんじやないかなと思つますね。そつなく授業に出て、そつなくサークルに出て、そつなく友達と楽しくやつて、という風にそつなく色々なすのものもちろんいいことなだけで、それに

プラスアルファのものがもしあれば、非常に充実した大学生活になるのかなと思います。4年というのは実はすごく短くてあっという間に終わってしまうので、1年生だったとしても、「もう先はそこまで長くないんだ」という風に思い始めていいんじゃないかと思えますね。

★社会探究領域 地域研究授業科目群

丸田 孝志 先生



1930年代〜50年代ぐらいの中国の、共産党を中心とした政治と社会の関係を研究しています。特にやっていることは、権力が民俗や風習、信仰などをどのように利用して、社会を組織したり、宣伝をしたり、動員したりするのかということです。

Q. その研究をしようと思ったきっかけというのはあるのでしょうか。

大学院のころまでは、共産党の思想統制と粛清の政治運動について研究していました。我々が学生のころは文化大革命の実態が明らかに、中国の社会主義の矛盾がどんどんわかってきた時代でした。ただ、このような研究は、

史料的な限界も多く、行き詰まりを感じていました。その一方で、歴史学では、古い時代の人々の心のあり方、信仰や習慣、宇宙観、身体や時間の感覚などから歴史を見る研究が、西洋史や日本史でだんだんとブームになってきた時代でした。ドクターを出て、韓国の大学で講師をしていた時期、休みの度に今の妻の実家に入り浸っていました。彼女のお父さんは中国残留孤児で、お母さんは中国人ですが、そのお母さんが、ある日、「今日は立春で日が悪いから、外

に出るとよくない」というようなことを言うんです。その時に、昔の感覚というか、庶民の時間の感覚を感じたんです。その感覚、つまり旧暦の時間の感覚で、昔の共産党の新聞を読んてみたら発見があるんじゃないかと思ってやってみました。本当に面白い事実がどんどん出てきました。無味乾燥に見える政治集会が、多くの人の集まる市の日に行われており、その日は農耕に大切な節句の日でもあり、その信仰・習俗に沿った宣伝をしながら、表向きには共産党の記念日の行事として開催されているなど……。それから、今のテーマについて本格的に研究するようになりました。

Q. 授業で学生さんに伝えたいこと、どういった風にとか、何を特に伝えたいとかいうことがあったりするのでしょうか。

いつも心がけたいと思っているのは、中国社会と日本社会がどのように違うのか、なぜ違うのか、ということ、歴史の流れの中でしたっけり考えてもらいたい、ということ。20年くらい前までは、日本と中国は、互いをもっと優しい目で見えていて、お互い似ているから、これから先わかりあって理解しなきゃいけない

★専門 近代中国における文化的国民統合、中国共産党史

Q. まず、研究内容について質問いたします。先生は、具体的にどのような研究をされているのか教えてください。

んよ、という雰囲気があったんですが、今は最初から違うということはよくわかっているけど、場合によっては異質で理解不能という雰囲気もあるから、違うことを前提でどう理解しようか、なんで違うんだろうか、というようなことを、もうちょっと大きな目で理解できるようにしてもらいたいな、と思っています。

Q・学生時代はどんな学生だったんですか？

何をどう勉強したらよいかわからず、中国語だけを地道に勉強しているような学生でした。勉強以外でやったことかというと、大学3年生の時の夏休みに、中国に1回行つとかないといけないと思ひ、1か月自由旅行に行つたことですかね。中国の生活習慣や社会の雰囲気などを、身をもって感じる事ができ、日本と中国の社会のあり方が徹底的に違うという事を思い知りました。

Q・研究をする上で心がけていることは？

最終的には面白いかどうかなんですよね。知的に面白くなければ追究することはできないと思ひ、あと、歴史学なので徹底的に史料と向き合うことができなければならぬとい

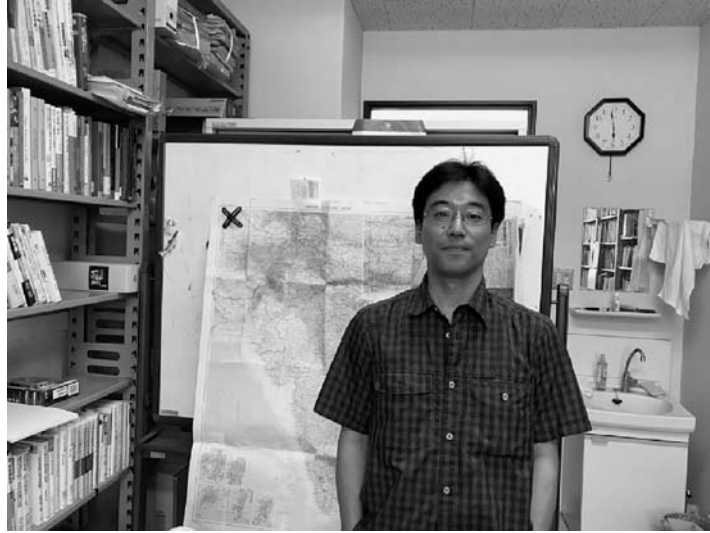
けないので、その作業に価値を見出せるかということが大事なんです。歴史学は、理論的なモデルのある社会学や政治学とは異なり、その時代はどんな時代で、どのような状況で何がどのように起こつたのかと、いろんな事実を丁寧に突き固めていって、時代の個性と流れを解き明かすという特徴をもっています。そういう点では膨大で細かい作業がものすごく必要で、新聞でも何でもみつかつた史料は丁寧に読んでいく、そういう丁寧さを心がけなきゃいけないですよ。丁寧な作業をこなすためには、それに価値があると思ひなければならぬわけです。

Q・総科生に一言。

若いうちはいろんなことをやってみてほしいですね。自分の反省から言えますが、時間があつて自由がきく時に、一生のうちでこれだけはやっておきたいことをやってほしいと思います。やつぱり、就職したらなかなかできないですからね。僕も、一生のうちでも中国にはいけないかもしれないと思つたから、中国旅行に行つたわけで、皆さんにもぜひそういった経験をしてほしいです。それから、例えば文科省や大学の方針で英語力の向上が求め

られているから、英語だけやるとけいいなどというように、上の方から与えられる枠にはまらず、自分が本当にやりたいことに沿つて、何をやるべきかを考へてほしいと思います。

佐々木 宏 先生



一言でいうと貧困の社会学的研究です。インド研究の業績が多いので「インド研究者」と言われることも多いのですが、当の本人としては調査地がインドにも日本にもある、という感じですか。以前、北海道大学に勤めていたのですが、当時は札幌のホームレス問題に取り組んでいました。広島に来てからは、広島的生活保護利用者の調査研究をやっています。

Q・研究を始めるきっかけは何だったのですか？

私の学生時代の研究室では日本ほか先進国の貧困問題を研究していましたが、そこに所属しながらインドの研究をさせてもらっていました。その研究室でインドを対象にした貧困調査を個人研究としてしつつグループで日本の研究もしていました。個人研究として日本のことも引き受けて、二足のわらじが本格的になったのは、北海道大学の博士課程を経て、その研究室で助手の仕事を始めた頃からです。これは今だから言えることですが、そのホームレス支援のマネジメントをする条件で助手に就職しました。その仕事がとて面白かったので、積極的に自分の研究として日本の研究も始めま

した。以上が日本の研究を始めるきっかけです。インド研究については学生の頃に、趣味で途上国への一人旅を繰り返す中で、インドの子どもの貧困の問題、特に児童労働の問題を卒業論文で取り上げることにしました。その時は軽い気持ちでしたが、付き合いも増えていつて途中で投げ出すことができなくなったということですね。

Q・北海道でのホームレスの支援では具体的にどのような活動をなさっていたのですか？

例えば食料や日用品を配る炊き出し、定期的な夜、街をまわって声をかける夜回りなどです。これらの目的は、物を配ることや声をかけることではありません。これらの活動を窓口にして、彼らが抱える困りごとを聞き、引き受け、その人の希望に沿う形で脱野宿の支援を行うことです。具体的には就職活動や年金、失業保険、生活保護利用の手続きの手伝いなどです。

Q・インドでは研究以外の活動をなさっているのですか？

インドでお世話になっているお寺が経営している、地域の貧しい子ども向けの学校の活動

Q・佐々木先生の研究内容について教えてください。

★専門 福祉社会学、途上国の貧困と教育

資金を日本で集め、インドにそれを届け、インドの活動を日本の支援者に報告する、という橋渡しのような活動を去年までしていました。これからもそのお寺との付き合いが続く限りは続くと思いますが、今は事情があつて休止しています。

Q・研究の魅力を教えてください。

貧困や社会福祉の問題を研究し支援もしている、というとマザーテレサのような人、あるいは偽善者という皮肉も含め、正義感が強いあるいは思いやりのある人と思われたり言われたりすることがあります。もちろん、そのような人はこの業界にたくさんいますが、私はそうではありません。信仰心もないし、正直言つて研究や支援の対象者すべてに愛情や哀れみを感じているわけではないです。しかし、この世界で出会う人々が面白いのです。貧困にかかわる人間の姿というのは、汚らしさも含めてとても魅力的です。金がない状態はある種の極限状態で、人間ドラマとして面白いこともあります。当事者だけでなく、周りの支え手やこの問題に批判的な人々、この問題を取り巻く全ての人の良いところ、悪いところ、醜いところ、愛おし

いところ、全てがわかりやすく現れて、人間っていいなあ、と感じる瞬間が多いです。貧困は人間の良い面・悪い面を映す鏡のような現象ですかね。

Q・総合科学部での学びが先生の仕事に対してもたらす良い影響とは何でしょうか。

自分自身の研究にメリットがあるかはわからないけれど教育については確実にあります。貧困という問題をもっと考えてもらう時に、他の語り口で語る先生がいて、一緒にそれを皆さんの前でプレゼンできるのは、頼もしいし、ありがたいいつも思っています。

Q・学生時代の勉強以外での面でどんな活動をなさっていたのか教えてください。

冬、春に途上国をフラフラすることをしていたので、そのために夏休みにアルバイトをよくしていました。あとは、山登りが好きで友達と一緒によく登っていました。院生の頃から川釣りに切り替えて、今でも続けています。

途上国の旅で強烈に印象に残っていて、自分の中でターニングポイントになったことは、マラリアにかかって入院したこと。同じ頃、イン

ド中を何年も飛び込みで調査依頼をして回ったけど、なんのコネもない自分はとても苦戦して、この研究をやめようかと思っていたんです。しかし、英語の通じない街の病院に入院し、ヒンディー語がしゃべれない自分がまったくインドの普通の人の生活のことを知ろうとしていなかったことに気づかされました。だったら少なくともヒンディー語ができるようになるころまでやってみて、その上で研究やめるんだったらやめたほうがいいんじゃないかと思ひ直して。ちょうどこの時に調査拠点が見つかって研究が一気に進みましたね(笑)。

Q・研究のインタビューやアンケートというのは、インドの方でも直接行うのですか。

貧困家庭から大学に進学した若者の聞き取り調査を3年間ほどしています。大学に行くまでどんな苦勞をしたか、大学でどんな勉強をしてどんな夢を持っているのか、卒業の時にその夢は本当になつていのかどうか、どの辺に障害があるのかなど。私のインド研究のメインテーマが「教育を通じた脱貧困支援」なので、大学に行くことによって貧困から脱出することができているのかなどを同じ子ども達を何

年もかけて見て、調査するプロジェクトを継続
しています。

Q. では、同じインタビュー対象者と長いおつきあいをされているということですか。

今やっているのは特にそうですね。学校で学ぶという経験がその子たちの将来を切り開いているのかというのを見たいから、入学のころから追いかけている子もいます。どんな就職活動をしているなど…結論から言うとしても苦勞しています。そこで、具体的に何に苦勞しているのかを調べています。北海道でのホームレス支援は24時間対応でした。夜中に電話が来て、駆け付けることもしばしば。でもこれは面白くやっていたのであまり苦にはなっていませんでした。

Q. 先生は研究（インドと日本）をなさることで目的としていることはありますか？

インドに関しては、僕はあくまで日本人なので、日本の問題に比べると関わり方は制限されるので当事者が解決していくべきだと思いません。しかし「貧困の悪循環」を少しでも緩和できる制度作りというのを大きな目的として持

っています。また研究者には、問題を正確に描いて人々に伝えるという重要な任務があると思います。だから、この問題を解決することが目的というよりも、いかにきちんとインドの貧困と教育の問題を正確に描き、問題解決の勘所をどう掘り下げるのかというのが目的になるのだと思います。日本の貧困問題の場合は専門家と一般の人の間で認識に大きな差があるため、この差を埋めるためにこの問題の理解をどう進めていくかを大きな課題としています。

Q. 最後になりますが、総科の学生全員に対して一言お願いします。

自分の好きなことやりたいことをのびのびとやってほしいです。これだけは総科の学生や若者だけでなく、人類一般の一人一人に願っていることです。みんな好きなことを思うようにやればいいじゃんって思っています。先生っぽく偉そうに言うと、学生を見て時々残念に思うのは、大学は4年で卒業しないといけない、そのために何かをしようと、大学卒業したら就職しなきゃいけないから何かアクションをするとかのことが、それだけかい！と思います(笑)。本人が4年で卒業したくてするならいいし、卒

業して働きたくて働くのだったらいいのだけど、世の中の流れに合わせている人を見ると、その人は別の意味で充実していてハッピーなのかもしれないけれど、それって面白いのかな？と思います。もっとなんかやりたいことをやりたいようにすればいいのとか。特に大学に入ってわかると思うけど、高校までと違って時間割も自分で作るし、場合によっては授業なんか受けなくても単位取ろうと思ったら取れたりすることも可能ですよ？だから、この4年間という時間は自分で好きに使っていい4年だと思います。自分が大学生だった4年間を振り返ってつくづく思うのは、この4年というのは、運よく与えられた本当の意味で自分の好きなことをできる4年という時間だから、世の中や学校が要求してくるような枠に乗っかって生きる必要は全然ないと思っています。